アニメ批評集
ロボットSF編

『マクロスF（フロンティア）』

マクロスF(フロンティア) 1 [Blu-ray]
バンダイビジュアル 2008-07-25

by G-Tools , 2010/12/05

（2009年7月5日ブログにて発表）
ガンダムやエヴァンゲリオンがアニメオタクを超えて一般的かつ世界的に大人気となった昨今、マクロスが忘れ去られているなと思った。ガンダムやエヴァは新作やリメイク版がどんどん作られているけど、マクロスは何年も作られていない。もったいない。深夜アニメなんて見ていないから、マクロスの新作が昨年放送されていたことに今まで気づかなかったけど、マクロスがようやく復活していたことに、菅野よう子つながりで気づいた。

大学時代の同級生の女の子の話。彼女の父親は図書館で働いている。彼女の父親の大学時代の友人はたいてい大学教授など高度な専門職についたけど、父親だけコースから外れたのだという。娘は小学生時代、父親と父親の友人がマクロスのＶＨＳを交換している場面を目撃している。ちょっとインテリな大人たちが、すごいから見ろと娘に強要する変なアニメ。そんなお父さんなかなかいないから、娘にとってはトラウマになるアニメ。それがマクロスなのだと僕の脳にインプットされている。

ＳＦ 研究会は、70年代くらいまで、真剣にＳＦをやっていた。文明批評をやっていた。80年代以降、ＳＦ研究会がオタク化する。ＳＦは美少女美少年キャラクターを偏愛する、それまでのＳＦとは異なるライトでポップなものになる。そのＳＦ路線変更を象徴するのが、80年代初頭に登場した超時空要塞マクロスだっ た。マクロスは、ロボットＳＦなのに恋愛というか三角関係メインで、アイドルも登場する。オタク受け要素満載。しかし、マクロスが何故世界的に評価されているかといえば、ポップカルチャーと戦争が結びついている点である。地球侵略に来た異星人は、戦うことしか知らない。アイドルも遊びも知らない。アイドル リン・ミンメイが異星人に向けて「愛・おぼえていますか」を歌う。アイドルソングによって、戦争が終結し、異星人と地球人の間に融和が生まれる。

結局、クソ真面目な文明批評や戦争物語では、世界は救われない。世界はポップと娯楽と自由恋愛を愛している。アイドルが歌うことで世界が平和になるという、 冷戦の終結を予言するかのようなマクロスの展開は、ＳＦの新しい地平を切り開いた。マクロスシリーズ最新作「マクロスＦ（フロンティア）」を見ないわけにはいかない。

（2009年7月6日ブログにて発表。サントラＣＤのレビュー）
昔のＳＦは文明批評だったのに、最近のＳＦは萌え系で文明批評の威力を失ったなんて嘆いていたけれど、いわば萌え系ＳＦの代表格というか創始者のマクロスシリーズ最新作のヴォーカルサントラを聞いて、菅野よう子が作り出す楽曲のクオリティーの高さに驚愕し、転向した。ＳＦは今あるマクロスＦ的な姿でハッピーなのだと。

アイドルが歌を歌うことで、戦争が終わる。戦争することが馬鹿らしくなる。すばらしいカルチャーの力を紛争溢れる世界に示すこと。マクロス。

音楽は戦争を終わらすこともできるけれど、音楽が戦意高揚に利用されることもある。当マクロスＦのボーカルベストアルバムには、「アイモアイモ」と歌う神秘 的、民族音楽的な歌の軍歌バージョンも収録されている。歌がもっていた本来の意味が剥ぎ取られ、戦意高揚の歌詞をつけられ、国家に強制されて歌わされる悲劇。

萌え系オタク文化を批判する文脈は多々あるが、マクロスＦは、楽曲にまつわる戦争悲劇的展開を作り出すことで、アニメカルチャー批判をはねつけるストーリーを生み出した。

音楽は戦争を終わらせる力を持つけれど、戦争は音楽をも利用する。そのドラマを萌え系アニメにしたマクロスはすごい。そんな薀蓄抜きにして、菅野よう子の楽曲がすばらし過ぎてすごい。デカルチャー。

（2009年7月20日ブログにて発表。最終回視聴後のレビュー）
ヒロイン、ランカ・リーの言葉。
（人間は）「ちゃんと気持ちを伝え合わないと、わかりあえない生き物」

作品中に登場するバジュラという生物は、話さなくても、気持ちを伝え合わずとも、わかりあえる動物として描かれる。バジュラには個がない。

バジュラにしてみれば、人類の間には、三角関係とか失恋とか戦争とか、ディスコミュニケーションが蔓延しているように見える。

一部の人間が、人類を進化させようとする。バジュラみたいに、みんなの意識がつながって、争いも対立もない世界を到来させようとする。しかし、みんなの意見が同じという社会では、一見権力は平等に分散しているようで、その実、ある中心部分に権力が一極集中している。

生命体ネットワークの中心にある情報装置が、こっちに行こうと決定すれば、その選択が間違っていても、生命体の全構成員が批判意見もなく、間違った方向になだれこむ。ヴァジュラという存在は、国家社会主義とか、共産主義とか宗教原理主義とか、一見成員の平等を説く国家に、独裁者が生まれることのアナロジーになっている。

人類の究極進化を阻止するため、主人公たちが戦う。人間は、一人一人違うままでいい、みんながばらばらの活動をしているままでいい。ばらばらだから、しっかり気持ちを伝えないとわかり合えないけれど、それでいいというテーマ。

歌うことは、求愛のシグナル。しっかり気持ちを伝えるためにみんなで歌う。世界レベルで視聴される価値のあるアニメ。

『攻殻機動隊 **STAND ALONE COMPLEX**』

攻殻機動隊 STAND ALONE COMPLEX The Laughing Man [Blu-ray]
バンダイビジュアル 2010-12-22

by G-Tools , 2010/12/05

（2009年7月6日ブログにて発表）

「攻殻機動隊 STAND ALONE COMPLEX The Laughing Man」 は、テレビシリーズ『攻殻機動隊 STAND ALONE COMPLEX』第1シーズン全26話のメインパート「笑い男事件」の2時間40分編集版である。話をはしょりすぎという批判意見がネット上に多いけれど、時間がなく、この他にもたくさん小説や映画を体験する必要のある人にとっては、ありがたい編集だ。

ネットハッカーによる企業テロ「笑い男事件」。笑い男事件の犯人はサリンジャー「ライ麦畑をつかまえて」の愛読者で、社会や政治家のインチキが嫌い。この作品は、ジャンルで言うとサイバーパンクＳＦだけれど、事件報道場面の描写とか、事件の細部を語る描き方は、本格推理小説、ハリウッドの実写サスペンスそのものだ。アニメと思ってなめて見ていると、アニメではない大人の作りになっていて驚 く。このクオリティーの高さというか、外した作り方は、日本のアニメにしかない。サイバーパンクＳＦは、異星人を描くのをやめて、現代社会の延長線上にある高度情報社会を描き出す。ハッカーの活躍、巨大企業の暗部、政治の腐敗、芸能アイドルの人気。『攻殻機動隊』らサイバーパンクの源流たるギブスンの 「ニューロマンサー」は文体もパンクで実験的で読みにくいけれど、ＴＶシリーズの『攻殻機動隊』は、エンターテインメントになっていて面白い。

エ ンターテインメントといっても、哲学的な対話は多い。こんなに難しい会話繰り返して大丈夫かと、見ていて不安になるけど、難しいから面白い。利権を求める巨大企業と自衛隊と保守政治家の癒着、真実を報道しないマスコミなんて、現実に日本で起きているニュースの生き写しみたいな事件が、作中に起きる。

ＡＩで動くロボットが、死ぬ場面で「神様、僕たちは無力でした」と呟く。すると草薙少佐が、無力じゃないよと、聖母様みたいに答えを返す。この場面を見ていて、ロボットにとっては、創造してくれた人間が神様なのだと思った。

人間は今まで創造者として神を想定していたけれど、実際のところ生命体は、自発的に宇宙に誕生し、今まで生成変化を繰り返してきた。生きて心の中に記憶を宿す。自分の遺伝情報はＤＮＡとして子孫に受継がれるけれど、 細かい思い出、記憶は子孫にも残らない。故に人間は、腕時計や本など外部情報に、自分の記憶を重ねて残す。

物語の途中に作家の引用が何度 も出てく る。作家の引用文も自己の外部に記録された外部情報の利用だ。「未成熟の人間は理想に燃えて行動するが、成熟した人間は生活のために理想を犠牲にする」み たいな調子の引用と、「動かないでいれば誰かが会いに来るだろう」みたいな調子の引用が、心に残った。ＳＦをずっと読んできたけれど、現段階のＳＦ最終形 態は、この「攻殻機動隊 STAND ALONE COMPLEX」だと思えた。

攻殻機動隊S.A.C. 2nd GIG Individual Eleven [Blu-ray]
バンダイビジュアル 2010-12-22

by G-Tools , 2010/12/05

（2009年7月24日ブログにて発表）
『攻殻機動隊 S.A.C. 2nd GIG Individual Eleven』は、 攻殻機動隊テレビアニメ版セカンドシーズンのダイジェスト版ＤＶＤ。セカンドシーズンから制作に押井守が参加したせいか、映画版「機動警察パトレイバー」の再構築版と思える内容（パトレイバーも攻殻機動隊もタイトルに「機動」がついている。ガンダムの力おそるべし）。

「個別の11人」というテロリスト集団が、ビル屋上で集団自決。一人「個別の11人」の思想に疑問を感じたクゼは、死なずに生き残る。クゼは元自衛軍の兵士で あり、中国奥地で起きた民族反乱事件の際、国際平和維持活動の一環として、中国奥地に派遣された部隊に所属していた。

クゼは、ハブ電脳を介して、日本国内にいる難民300万人の英雄的指導者となる。長崎の出島に独立国を打ちたてようとして、日本政府と敵対する。日本政府がもたもたしてる と、アメリカ軍が独立国撃破のため、潜水艦に原爆積んでやってくるし、こんなの普通のアニメじゃない、すごいディープで政治的で、現代的な展開が起きる。

北方領土の問題とか、日本の自衛権の問題とか、こんな真剣に語る作品は、映画にも小説にも中々ない。日本のアニメがいかに特殊で独創的なものであるのか、 何故世界中で日本のマンガやアニメが愛されているのか、おそらくアニメカルチャーの先端に立つ「攻殻機動隊」を見れば、感じてもらえると思う。このようなテーマを扱うアニメは、世界中で日本にしかない。しかも芸術目的の映画作品じゃなく、エンターテインメントとして。テレビ放送の深夜アニメ番組として。

『超時空要塞マクロス　愛・覚えていますか』

超時空要塞マクロス 愛・おぼえていますか HDリマスター版 [DVD]
バンダイビジュアル 2007-12-21

by G-Tools , 2010/12/05

（2009年7月26日ブログにて発表）
エンドタイトルのスタッフテロップ、作画担当のスタッフ名が並ぶ先頭に、エヴァンゲリオンの監督庵野英明の名前が出てくる。エヴァやガンダムが好きなら、やっぱり『マクロス』は外せない。ガンダムやエヴァがなんとなくいつも悲劇的でネガティブなエンドになるのに対し、『マクロス』は、常にポジティブに物語が終わる。文化が世界史にもたらす肯定的力を信じているからである。

異星の巨人族ゼントラーディーが地球人と戦争する。ゼントラーディーは男と女が完全に分かれており、男女はいつも戦争する戦闘種族である。地球人の男女が一緒にいて、キスしたりする場面を見て、ゼントラーディーは 「デカルチャー！」と驚嘆する。ゼントラーディーは元々、地球人と同じ起源を持っていた。科学技術の進展により、恋愛妊娠出産不要で、生命の繁殖に成功したゼントラーディーたちは、男と女が分離して、戦闘に特化した種族になった。ゼントラーディーがまだ男女で愛し合っていた頃に歌われていた歌「愛・覚えて いますか」を、地球人のアイドルリン・ミンメイが歌うことで、戦争が終結する。

80年代的なアイドルのポップ・ソングが、戦争を終わらせる。ゼントラーディーがドイツ語で喋っているのも印象的だ。1984年公開のマクロスは、東西冷戦が戦争によって終結せず、文化的な活動によって終わることを予言していた。マクロス以前の70年代に作られていたSFロボットアニメには、（こんなの子ども向けのテレビアニメでするのもあれなんだけど）反戦、反ベ トナム戦争のテーマが裏にあった。マクロスを作ったのは、20代の慶応義塾の学生仲間。全共闘世代の学園闘争も知らない、新人類の若者の価値観で80年代の到来を告げるアニメが作られた。ラブコメとロボットSFの融合。アイドル、三角関係が、萌え要素として本筋のドラマと分離しているのではない、萌え要素こそ戦争を終わらせる平和の象徴となる。

アイドルや萌え要素の政府による戦争利用といった、9.11以降の現代的テーマは、マクロス25周年記念作、今秋 劇場版公開予定「マクロスF（フロンティア）虚空歌姫～イツワリノウタヒメ～」に引き継がれる。ゼロ年代には、誰かの都合で作られたイツワリのアイドルが たくさんいるし、イツワリの正義の名の下に、自爆テロや、自爆テロに対する報復として、非武装市民に対する誤爆が行われた。 アニメの美少女萌えは、戦争を終わらせることができるのか。マクロスはそんなバカっぽい妄想の物語に、真摯にコミットしている。

『伝説巨神イデオン　接触篇／発動篇』

伝説巨神イデオン 接触篇/発動篇 [DVD]
矢立肇
タキコーポレーション 2006-05-05

by G-Tools , 2010/12/05

（2009年7月26日ブログにて発表）
『伝説巨神イデオン』は、1980年放送のテレビアニメ。1979年『機動戦士ガンダム』テレビシリーズ終了後の富野喜幸（現・由悠季）監督作品。いつもの富野アニメよろしく悲劇的で難解でトラウマ的。途中打ち切りになったが、後に接触篇、発動篇の2作映画化された。

ガンダムは地球人類同士の戦争物語だったけれど、イデオンは地球人類と異星人との接触を描く。異星人との接触という点では、後の『超時空要塞マクロス』に影響を与えたし、映画版ラストの全人類滅亡かつ救済のトラウマ的光景は、『新世紀エヴァンゲリオン』に影響を与えた。

宇宙に移民した地球人類が、異星人バックフランと出会う。バックフランも自分たちの母星のことを「地球」と言っている。自動翻訳機で話し合っているから、地 球人類も異星人も母星を「地球」と言うのかもしれないけど、両方地球なのが面白かった。

地球人類とバックフラン二つの文明に残るイデの神話。巨大なる力、 イデに導かれてか、地球人とバックフランが全面戦争に突入する。地球人の艦長とバックフランの姫の間に恋愛が芽生え、姫はお腹に子どもを宿すけれど、妊娠 中に、実の姉に殺される。姫のお腹の子どもは、メシアと呼ばれる。戦いあい、憎しみあう二つの文明にとって、希望となる新しい生命のかたち、メシア。メシアはニュータイプの思想に似ている。

地球人とバックフランの戦争によって、両生命体全員滅亡。登場人物全員が裸になって、敵味方問わずにこにこ笑いながら、宙を舞うラストにいたる。イデは殺し合う残虐な古い生命を全て抹殺して、愛し合うメシアに次の時代の建設を託したのか。人類の全否定かつ全肯定。こんな妄想爆発な終末論的物語をロボットアニメにしているのは、日本だけ。改めて、日本のマンガ・アニメカルチャーの世界的異常な立ち位置を認識させられた映画だった。

『機動戦士ガンダム**SEED**』

機動戦士ガンダムSEED スペシャルエディション 虚空の戦場 [DVD]
矢立肇
バンダイビジュアル 2004-08-27

by G-Tools , 2010/12/05

（2009年7月26日ブログにて発表）

『機動戦士ガンダムSEED』放送当時は、ピンク色の髪の毛の萌え系美少女があんまりガンダムっぽくなくて、そんな注意して見ていなかった。ＤＶＤで スペシャルエディションを見始める。開始30分くらいはそんなに面白くなかった。ピンク色の髪の毛の美少女キャラが出てきたら、途端に話が面白くなっ た。萌えの力は偉大である。

美少女キャラ、ラクス・クラインは、地球連合軍に敵対する宇宙移民、プラント側の人間だ。地球連合軍の人は、ナチュラルと呼ばれ、遺伝子操作をしていないが、宇宙で暮らすプラントの人々は、コーディネーターと呼ばれ、遺伝子操作をしている強化人間である（SEEDの世界では、初代ガンダムにあったニュータイプ思想が、自然発生的でなく、遺伝子操作という科学技術によって実現している。コーディネーターが極少数の選ばれた民でなく、宇宙で暮らす人全員なのも、過去のニュータイプ思想物語とは異なる）。ラクスを見て、ナチュラルの人は、彼女に嫌悪・差別感情を感じるけれど、ラクスは、ナチュラルもコーディネーターも人間同士だし、私は軍人でもありません、お友達になりましょうと言う。

ラクス・クラインは、二つの人種の違いを超えた、友愛、平和の思想を語り続け、ナチュラル・コーディネーター間の戦争終結の鍵になる。アイドルで歌も歌うラクスは、マクロスシリーズのヒロイン像に似ている。

マクロスシリーズのヒロインは、思想を語ったりしない。歌って恋愛しているうちに、彼女の持つ文化的力が戦争終結の鍵に なっていくのだけれど、ラクスは特にたくさん歌うわけでもなく、平和の思想を語り続ける。ここが体感するマクロスと、登場人物みんなが戦争について哲学的 に語り続けるガンダムSEEDの違いか。

どちらにしても、こんな重いテーマを土曜夕方の子ども向けアニメ番組でやっているのだから、日本のアニメ文化のレベルは、おそろしい地点に達している。SEEDが特別なわけでなく、SFロボットアニメは昔からこうだった。元をたどれば手塚治虫まで帰る伝統の力である。

『機動戦士ガンダム**SEED DISTINY**』

機動戦士ガンダムSEED DESTINY スペシャルエディション 砕かれた世界 [DVD]
バンダイビジュアル 2006-05-26

by G-Tools , 2010/12/05

（2009年7月27日ブログにて発表）
今日から1週間NHKBS2で宇宙世紀ガンダム特集だけれど、NHKの思惑にかかわらず、僕は『機動戦士ガンダムSEED　DESTINY』を見ていた。

当作品は、人気作『機動戦士ガンダムSEED』の続編。前作で、地球連合軍と宇宙移民プラントの戦争は終わったはずだった。しかし、憂国の士はどこの世界にでもいるもので、宇宙は再び緊張に包まれる。

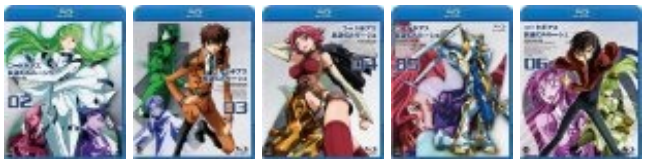
プラントの議長ギルバート・デュランダル（声優はシャアと同じ池田秀一氏。デュランダルもシャア的キャラクター造型で、シャア萌え可能）は、真の敵は地球連合軍でなく、武器商人たちであるという。

武器商人の撃破、永遠平和の実現を目指して、プラント所属のザフト軍は地球に向かうが、前作の主人公キラ・ヤマトたちは、デュランダル議長の発言は建前ではないかと疑う。キラたちの懸念は当たり、武器商人撃破後、デュランダルは、自分の思想に反対する地球の人たちと全面戦争を開始する。デュランダル議長は戦争を否定し、気高い理想を語るのだが、その実、行われるのは、議長の意見に反対する人を制圧するための、正義の戦争だった。

真の敵は敵国政府ではない、軍隊に武器を提供している企業であるという正義の発言は、現代的で面白かった。さらに軍需産業を叩くという正義の発言が、侵略戦争開始のための口実でしかなかったというのも、泥臭い政治っぽくて、面白い。美少年美少女だらけの登場人物みんなが、戦争と平和について語るこのようなアニメが、土曜午後、子どものアニメ番組枠で放送されて、大人も含めて人気になる国は、日本以外の国では考えられない。現代史とリンクしてくるアニメだった。

『コードギアス　反逆のルルーシュ』

コードギアス 反逆のルルーシュ volume01 [Blu-ray]
バンダイビジュアル 2008-08-22



by G-Tools , 2010/12/05

（2009年7月29日ブログにて発表）
ガンダム＋デスノート＋学園美少女萌えという感じの、おいしいとこどり的アニメ。超大国「神聖ブリタニア帝国」が日本を植民地化、日本は「エリア11」 に、日本人は「イレヴン」と呼ばれることになる。ブリタニア帝国で皇位継承権を持っていた王子ルルーシュは、何者かに母を殺され、妹は襲撃で失明、皇位継 承権も剥奪され、妹と一緒に日本に島流しの憂き目にあう。

植民地となった日本でルルーシュは、何年も生き続けている少女に出会い、ギアス という特殊能力を授かる。ギアスの力がデスノート的。ルルーシュは見つめた相手にいかなる命令でも従うよう強制する「絶対遵守」の力を持った。ルルーシュ はギアスの力を利用して、日本の反乱を扇動、母殺しの復讐、ブリタニア帝国皇位の奪還をもくろむ。

美形のアンチヒーロールルーシュが主役で、結構アンモラルな描写が多い。ルルーシュと戦う、日本国最後の総理大臣の息子、枢木スザクは、清廉潔白、正義の味方チックで、『デスノート』エルのような立ち位置だ。スザクの方が昔のアニメなら主役だった。いろいろ問題含みだけれど面白い。

『コードギアス　反逆のルルーシュ**R2**』

コードギアス 反逆のルルーシュ R2 volume01 [Blu-ray]
バンダイビジュアル 2008-08-22

by G-Tools , 2010/12/05

（2009年8月23日ブログにて発表）

『コードギアス　反逆のルルーシュR2』は、2008年のアニメ界を席捲したアニメ。ガンダム＋デスノート＋学園ラブコメという、日本のオタク・カルチャーのいい所を全て集めてみました的百花繚乱の作品。それを作っているのが素人でなく、日本のアニメ文化の中心の一つ、サンライズだからすごい。

専制君主制の世界最大勢力、ブリタニア帝国に占領された日本は、「エリア11」と改名され、日本人という存在も抹消、かつての日本人は「イレブン」と呼ばれる被征服者になる。何者かによって母を殺され、王位継承権を剥奪されたブリタニア帝国のかつての王子、ルルーシュは、見つめた相手に自分の命令を強制する力、 ギアスを手にする。ルルーシュは、ブリタニア帝国を滅ぼすため、日本の革命の指導者「ゼロ」を名乗り、ブリタニアに独立戦争をしかける…

ガンダムにおいて独立戦争は、宇宙の彼方、スペースコロニーで起きていたが、『コードギアス』では、近未来の日本を舞台に政治、外交、戦争の泥沼悲劇が描かれる。しかも、自分の意志を誰にでも強制できる力を持つ主人公ルルーシュは、『デスノート』の主人公のごとく、嘘、裏切り、策謀やりたい放題のアンチ・ ヒーローである。ルルーシュが通う高校で起きるラブコメが重苦しい物語に華を添える。黄金のお約束的展開により、新しい美形の敵キャラが出てくる と、ルルーシュの高校に転校生としてやってくるし、視聴者の人気を集める要素満載である。

物語後半、ブリタニア皇帝シャルルも、ルルー シュと同じくギアスの力を持っていたことが判明する。シャルルは、人類全体の意志が一つになる未来が理想と語る。対立も争いもない完全に調和した世界は、 宗教的理想の境地であると同時に、全体主義の独裁国家をも連想させるものである。

ルルーシュは、シャルルの意見に反対する。ありのままでいい、変化なしの世界は、生きた世界とは言えない。完結した、閉じた世界は「自分に優しい世界」であると言う。

ルルーシュが望むのは、「他人に優しい世界」である。個々人が自由に意志を持っているからこそ、対立や争いが起きるが、相手の自由意志を尊重する優しさを育 むことで、個人の自由意志を放棄することなく、平和を育てることができる。ギアスの力を使って、相手の考えを無視して自分の意見を強制する独裁者ルルー シュが何を言うか、お前が言っていることとやっていることは矛盾しているだろうとツッコミたくなるところだが、最終回で、ゼロの独裁者的行動の謎が解け る。

（以下最終回ネタバレ）
「巨悪を討つために悪もやむな し」「ゼロの人格は体でなく行動で示される」などと主人公ルルーシュは言うし、独立を果たした「合衆国日本」が、中国、インドなど周辺諸国と連合し、 「超合衆国」になっていくこのアニメを見ていると、ルルーシュが演じる独裁者の振る舞いが、戦前の軍国主義時代の日本を想像させて、アジア各国から抗議が 来るんじゃないかと思っていたが、最終回、ルルーシュは、世界中の憎しみを自分一人に集めるため、独裁者を演じていたことがわかる。ルルーシュに頼まれた 親友のスザクは、パレードの最中にルルーシュを暗殺する。独裁者である自分一人に憎しみを集めて、未来の世界が平和になることを願ったルルーシュ。『デス ノー ト』の終わり方よりもはるかによかった。

外国の日本文化研究者は、村上春樹の小説だけでなく『デスノート』『コードギアス』『マクロスF』『攻殻機動隊』 『涼宮ハルヒの憂鬱』『らき☆すた』なども、作品の受容のされ方まで含めて、きちんと向き合って研究する必要がある。

『機動戦士ガンダム**00**（ダブルオー）』

機動戦士ガンダム00 1 [Blu-ray]
バンダイビジュアル 2008-08-22

by G-Tools , 2010/12/05

（2009年8月31日ブログにて発表）

押井守監督のアニメ映画『スカイクロラ』が海外の映画祭で上映された時、少年が戦争で戦う映画に接した海外のプレスからは、押井監督の戦争観、世界観につ いて哲学的な質問が相次いだそうだ。日本のアニメ業界は、『機動戦士ガンダム』の頃より、少年がロボットに乗って戦うロボット戦争ＳＦアニメを作ってき た。9.11後の世界で、少年が武器を持って戦う世界の現実に対して、平和を謳歌してきた日本のアニメはどう答えるのか。その答えの一つが、ゼロ年代のガンダムシリーズ『機動戦士ガンダム00（ダブルオー）』である。

『ガンダム00』の舞台は、アメリカ合衆国を中心とする「ユニオン」、旧ＥＵ諸国を中心とする「ＡＥＵ」、中国・ロシアを中心とする「人類革新連盟」という、３つの超大国が冷戦状態にある西暦2307年の地球である。ガンダムは「戦争根絶」を掲げる組織「ソレスタル・ビーイング」が開発した新型のモビルスーツとして登場する。

中東出身の元少年ゲリラ、刹那・ Ｆ・セイエイ他、4人の青少年が戦争根絶のため、ガンダムに乗る。アイルランド出身のロックオン・ストラトスは、爆弾テロで家族を失った過去を持つ。アレ ルヤ・ハプティズムは、幼少期に超人機関で人体実験を受けており、凶暴な戦闘用別人格を心の中に抱えている。ティエリア・アーデは、遺伝子操作とナノマシンによって能力拡張を施されたイノベーターである。4人はガンダムに乗り、世界中の地域紛争に武力介入する。

「戦争根絶」を目指すソレスタル・ビーイングは、敵対する両方の軍に攻撃し、戦争終了を画策する。普通戦争に武力介入する 国家は、どちらか一方の味方になり、戦勝後はその地域の 利益獲得に走るが、ソレスタル・ビーイングは、ただ単に戦争を終わらせるためだけに武力介入する。戦いが終われば、また別の地域にいって、武力介入を繰り 返す。世界から戦争を根絶することなんて、不可能じゃないのか、とんでもない理想じゃないのか、戦争を終わらせるために、武力介入することは、正しいこと なのか？　様々な矛盾を抱え、世界から異端視されながらも、ガンダムは戦い続ける。

『機動戦士ガンダム』が始まる前の日本のロボットアニ メは、「ロボット戦闘ＳＦアニメ」だった。『ガンダム』から、『マクロス』『ボトムズ』『コードギアス』など、『ロボット戦争ＳＦアニメ』という世界のど こにもない日本独自の文化的伝統が始まった。『機動戦士ガンダム00』は、ゼロ年代の世界状況に答えるガンダムである。『戦争根絶』なんて深刻で問題提起 的なテーマを日曜夕方放送の子ども向けアニメ番組にしている国は、日本しかないのである。日本が安全保障されているからだろうか。ちなみに、『ガンダム 00』内の日本は、アジアにあるが、アメリカを筆頭とするユニオンに属する経済特区で、平和を保障されていたりする。

（2009年9月2日発表。最終回視聴後のレビュー）
ファーストシーズン前半は、正直あんまり面白くなかった。ガンダムだから、義務と惰性で見ていた感があったけど、オープニングとエンディングの歌が替わっ た後半から、突然面白くなった。「戦争根絶」を目的に、ガンダムに乗って紛争地域に武力介入するソレスタル・ビーイングと、ユニオン、ＡＥＵ、人類革新連盟の世界三大勢力の軍隊が集結して激突、ガンダム4体が壊滅のピンチを迎えたところで、めっちゃ強い新型のガンダム3体が現れる。

新型のガンダムに乗るトリニティ三兄弟も、ソレスタル・ビーイングの一員だという。三兄弟は、武器を持たない市民をも抹殺する過激派だった。「戦争根絶」を掲げるソレスタル・ビーイング内で方法論をめぐり分裂が起きる一方で、世界合同の国連軍が誕生し、ガンダム殲滅作戦が実行される。主人公たちは最後負けまく り、味方の美少女キャラも猛攻撃にあって戦死するし、一体どうなってしまうんだ！？　というところで、ファーストシーズンが終了する。

ファーストシーズンで一番印象的だったのは、沙慈・クロスロードと、ルイス・ハレヴィの運命を変えたサブ・エピソードだった。沙慈とルイスは、地域紛争は遠い話の経済特区・東京で平和に暮らす学生カップル。毎話壮絶な戦いの合間に沙慈とルイスの学園ラブコメエピソードが挿入されるのだが、親戚の結婚式出席のためヨーロッパに帰ったルイスは、ガンダムの襲撃にあう。トリニティ三兄弟の末っ子ネーナが気まぐれで、結婚式場を攻撃したのだ。ニーナがストレスを解消するために放った銃撃によって、ルイス以外の親族全員死亡、ルイスも重傷を負った。

ルイスがヨーロッパで怪我をしたと知って、沙慈はピザ屋のバイトをして買った指輪を手に飛行機に乗る。病院で会ったルイスはいつもと違い、物静かだった。沙慈は、かつてルイスがわがままを言って欲しがった指輪を渡す。もうはめられないのだとルイスが言う。ルイスの片腕は、ガンダムの気まぐれな襲撃で失われていたのだった。もう会わない方がいいと言うルイス。

ついこの前までは戦争とは無縁の80年代マンガ的学園ラブコメだった二人に、突然訪れる紛争の現実。ああ、これがガンダムだと思った（ちなみにこの後、報道記者をしている沙慈のお姉さんも、ソレスタル・ビーイングの秘密を取材する過程で、暗殺されてしまう）。

同時期に放送された『コードギアス反逆のルルーシュ』も、学園ラブコメと戦争ロボットＳＦが共存していた。『コードギアス』でも、文化祭のラブコメ的エピソードの次の回で、戦争とは無縁だったヒロインが陰謀に巻き込まれて死んだ。80年代のマンガ・アニメでは、学園ラブコメと戦争ロボットＳＦは分離していたが、ゼロ年代では融合した。永遠に続くかと思えるバカで楽しい日常が、突然、紛争によって切り裂かされる。マンガとアニメは時代状況を反映すると言うが、 このような未来を防ぐため、政権交代後の僕たちに何ができるだろうか。

（2009年9月3日ブログにて発表）
『機動戦士ガンダム00（ダブルオー）』ファーストシーズン中、最も印象に残る言葉はやはり、主人公刹那・Ｆ・セイエイが言った「俺がガンダムだ！」という決め台詞だろう。これだけ聞くとなんかばかばかしいけれど、言っている状況が深刻である。

高性能のガンダムを操るトリニティ三兄弟は、刹那たち既存のガン ダム・マイスターと違い、無抵抗の市民にも攻撃を加える。「戦争根絶」のためとはいえ、紛争当事国の軍需工場を破壊するトリニティ三兄弟。軍需工場には、 民間人の労働者も働いているというのに……

トリニティ三兄弟の破壊活動によって、ソレスタル・ビーイングに対する反感が世界に広まる。そんな状況で刹那は、トリニティ三兄弟を攻撃すると言う。ガンダムは、「戦争根絶」のために戦う。トリニティ三兄弟はガンダムに乗って殺戮を楽しんでいる。トリニティ三兄弟は、ガンダム・マイスターのようでいて、ガンダム・マイスターではない。ガンダムの理念を継承していない……

「俺がガンダムだ」という言葉は、こうした状況で発せられた。世界平和を実現するために、武力を使う事は果たして正しいことなのだろうか、矛盾しているのではないかという疑問は残る。組織が当初持っていた理想を守るためとはいえ、一兵士が組織全体の統率を破って行動に出ることは、青年将校によるクーデターを想像させるようで、やはり問題である。とはいえ、 「俺がガンダムだ」という言葉は、やっぱりガンダムファンにとっては嬉しい名言だ。お前アホだろっていう話だ。

「俺がガンダムだ」と言って出撃した刹那は、トリニティ三兄弟の乗るガンダムを攻撃する。ガンダム対ガンダム。一体どちらが、ガンダムなのか。俺か、三兄弟か。

みなさんも、組織が設立当初の理想から外れて、個人の欲望や利権獲得に走って暴走した時は、「俺がガンダムだ」と言って、自ら盾になりましょう。「俺がガンダムだ」と、一度は言ってみたいガンダム30周年の年であった。

『機動戦士ガンダム**00**（ダブルオー）セカンドシーズン』

機動戦士ガンダム00 セカンドシーズン 1 [Blu-ray]
バンダイビジュアル 2009-02-20

by G-Tools , 2010/12/05

（2009年9月7日ブログにて発表）
セカンドシーズンは、ファーストシーズンで描かれた物語の4年後、西暦2312年の地球が舞台となる。各国家群は地球連邦として統一された。人類は平和を迎えたかに見えたが、独立治安維持部隊「アロウズ」は、反地球連邦組織に極秘で弾圧を加えていた。地球連邦の暗部をとらえる主張や報道は、徹底した情報統制によって、世界市民には伏せられている。アロウズの非人道的な武力介入も、一切報道されない。情報統制に裏付けられた仮初めの平和の時代にあって、4年間姿を潜めていたソレスタル・ビーイングが活動を再開する……

国連軍によって壊滅させられていたソレスタル・ビーイングの面々が再集結する。4年の月日が登場人物たちを変えた。少年は青年になり、少女は魅力的な女性に変わる。彼ら彼女らは、敵味方問わずみな、戦争・紛争を原因とする暗い過去を背負っており、自分自身が抱えた問題に終止符を打つため、自分自身の正義を実現するため、戦いの場に身を投じていく……

セカンド シーズンは、オープニングのバックに流れる映像からして物哀しい。主要等人物たちはみな哀しげな顔つきで画面に現れる。泣きそうな顔で、手を伸ばして、何かを求めている表情をする彼ら彼女らが、入れ替わり立ち代り登場する。憎む必要もないのに憎みあい、愛し合いたいのに、愛せず、戦い合う。ファーストシー ズンで戦死した面々もオープニングに現れる。

セカンドシーズンは、戦争ロボット悲劇なのだ。ファーストとセカンドの間に横たわる、描かれなかった4年の月日が、物語を重厚化する。セカンドシーズン全体を覆う物哀しさ、やるせなさは、僕個人がガンダムシリーズ中一番好きな『機動戦士ゼータガンダム』を連想させた。

『亡国のイージス』などヒット作を持つ人気小説家、福井晴敏が原作小説を書いた『機動戦士ガンダムユニコーン』が、もうす ぐアニメ化されるという。ユニコーンの制作には、初代『機動戦士ガンダム』担当のスタッフがつく。製作スタッフはユニコーンの公式サイトで、おじさんだから最近 のガンダムシリーズは見ていないですが、古いガンダムファンの好みに答えるガンダムを作ろうと思います、という趣旨のコメントを書き残していた。僕自身 『シード』『ダブルオー』など、ゼロ年代のガンダムシリーズは、放送当初、興味がなくて見ていなかったけど、いざ見てみると、９．１１以後の世界状況を反 映して、かなり深刻なテーマに挑戦した作品だった。特に『ダブルオー』は、同時代の世界の紛争状況を反映して、ドラマが深刻である。何も子ども向けのアニ メ番組でここまでやらなくても、とも思える悲劇の物語構造だが、だからこそ、ガンダムなのである。初代ガンダムは、リアルな大人の戦争を描いて、世界のア ニメ表現に革新をもたらした。批判をおそれず、表現の限界に挑むことこそ、ガンダムの理念である。

日本の植民地独立を描いた『コードギア ス反逆のルルーシュＲ２』 の放送直後、日曜夕方17時という時間枠で、『ダブルオー』のセカンドシーズンが放送されるのだから、日本の子ども向けアニメ番組は、世界のどこにもない 特異点にある。戦いの悲劇を描いて、平和の尊さを視聴者に伝える……これらのアニメ作品を観ずにすましておくことは、実にもったいないと思えるのだった。

（2009年9月9日ブログにて発表）
ダブルオーセカンドシーズンに出演する魅力的な登場人物について書きます。（ネタバレあり）

１、ルイス・ハレヴィ
ファーストシー ズンでは学園ラブコメパート担当だった彼女も、4年後のセカンドシーズンでは、モビルスーツのパイロットに。親族の結婚式会場をガンダムに襲撃されたルイスは、両親を含めた親族全員死亡、ルイス自身も片手を失ったのだった。恋人の沙慈・クロスロードと別れたルイスは両親の仇のため、ガンダム打倒を目指してモビルスーツに乗り込む。物語終盤、両親の仇だったネーナ・トリニティを倒した後、ルイスはモビルスーツのコクピットで歓喜する。「やったよ、パパ、マ マ、仇とったよ、ガンダムを倒したよ…あはは、うふふ……ママ、パパ、どこ？　あたしやったよ？　やったんだから…だから…褒めてよぉ…よくやったって…ああああああ！！」」ガンダムを倒した後、両親と二度と会えない現実にぶち当たって、慟哭するルイス……彼女がモビルスーツに乗って戦うことになるとは、当初想像できなかった。「ああ、これこそガンダムだ」と涙が滲んだシーンだった。

2、沙慈（さじ）・クロスロード
ファーストシーズンではルイスの彼氏役でラブコメ担当だった沙慈も、4年後は宇宙で働く立派な青年となっている。恋人の家族の命を奪ったガンダムおよびソレスタル・ビーイングを憎んでいる沙慈は、反地球連邦の工作員と疑われるはめになる。沙慈は、嫌々ながらソレスタル・ビーイングと行動を共にすることになる。戦争に否定的な沙慈は、ガンダム批判を繰り返すが、沙慈のわがままな行動が原因で、反政府組織の秘密基地が地球連邦に襲撃され、大勢の人が死ぬ。罪の意識から、 自分に何かできることはないかと模索し始めた沙慈は、視聴者の視点に寄り添ったダブルオー・セカンドシーズンのもう一人の主人公である。

3、スメラギ・李（り）・ノリエガ
ガ ンダム４体を搭載するプトレマイオスの艦長で、戦術予報士のスメラギは、声がとても魅力的だ。戦術予報士とは、戦場の未来を予測し、効果的な戦術を立案することで、戦争の被害を最小限におさえる職業である。戦術家と代わらないような気がするけれど、スメラギさんは本気で、戦争の被害を最小限にしようと行動 している。ただその想いが強すぎたせいか、過去に友軍の同士討ちとなる戦術ミスを犯してしまう。自分の戦術ミスのせいで、恋人まで死なせてしまったスメラギさんは、以後酒を飲んで心の傷を紛らせつつ、「戦争根絶」のため戦う茨の道を歩む。お酒を飲む大人の女性艦長が背負う過去の苦しみ。スメラギ・李・ノリエガは、人間的魅力に溢れる好人物だった。

4、ソーマ･ピーリス（マリー・パーファシー）
超人機関技術研究所にいた少女時代は、マリー・パーファ シーという 名前で、五感がなかった彼女。ソーマ・ピーリスという別人格を手術で植えつけられて、超兵として戦場に出ることになる。マリーの頃の知り合い、アレルヤと 戦場で出会ったソーマ・ピーリスは、戦闘中に、マリーだった頃の記憶を取り戻す。マリー・パーファシーの性格は、古きよき「いい人」。こんなできた女性、 現実にもフィクションにも、もう天然記念物的で存在し難いから、逆に衝撃的である。マリー・パーファシーみたいな、すこぶるいい人になりたいと心の底から 思った。

ダブルオー登場人物中、一番印象深かったのはルイス・ハレヴィ、共感したのは沙慈、好意を持ったのはスメラギさん、憧れたのはマリー・パーファシーだった。

『機動戦士Ｚガンダム劇場版』

機動戦士Zガンダム -星を継ぐ者- [DVD]
富野由悠季
バンダイビジュアル 2005-10-28

by G-Tools , 2010/12/05

（2009年9月21日ブログにて発表）

『機動戦士Ｚガンダム A New Translation』は、1985年にテレビ放送された『機動戦士Ｚガンダム』の20周年記念劇場版。テレビシリーズのカットに新場面も追加されたリニューアル総集編である。僕は個人的に、ガンダムシリーズ中、テレビ版のＺガンダムが最高傑作だと思っていたから、エンディングが「健やか」に変更されたと噂の劇場版は見る気がしなかった。けれど5連休だから見てみた。

Ｚガンダムは、おそらく世界中で放送された子ども向けアニメ作品中、最も悲劇的なテレビアニメだ。ヒット作の続編は通常、主人公が継続して活躍するけれど、 ファーストの主人公アムロ・レイは、なんだかだらしなくて、頼りない大人として登場する。地球連邦軍は腐敗している。Ｚの主人公カミーユ・ビタンは、 ファーストの敵役シャア・アズナブルと一緒に、反地球連邦のゲリラ組織エウーゴのメンバーとして戦う。続編の常識を全てひっくり返すゼータガンダム最大の衝撃は、人が死にまくる壮絶なラストの展開だ。「え？この人も死んじゃうの？」と展開に追いつくのがやっとのスピードでみんな死んで行く中、最終回、主人公のカミーユが精神異常を来たして終了する。こんなトラウマチックな最終回のテレビアニメは、今後も生まれないだろう。

さて、劇場版は、 さすがに富野監督も反省したのか、「健やかな展開」になったと言われている。悲劇的に戦死するはずのキャラクターがみんな生きていたらやだなと想いつつ見ていたが、そこまでの改変はなかった。ラストはテレビ版と違い心温まるハッピーエンド。テレビ版最終回の地獄絵図的極限状況を知っているだけに、こういう展開も悪くないなと思えた。

1年間、毎週放送された長編作品を、劇場映画3本にまとめるのだから、当然カットされた名場面が山ほどある。 大学時代テレビシリーズをＤＶＤで見た時は、一時停止ボタンを押して、シャアの名言をノートに書きとめながら見ていた。シャアの名台詞の数々がカットされ たら嫌だなと思いつつ、約8年ぶりに見た劇場版では、一切ノートを取ることがなかった。名言がみんなカットされたのかだろうかと思いつつ、劇場版視聴後、 大学時代のノートを読み返してみた。

シャア：「籠の中の鳥は、干渉される道具でしかないことを覚えておくといい」

アムロ：「人の善意を無視する奴は、一生苦しむぞ！　カミーユ！」

シャア：「今日の都合で魂を売った人々の決定など、明日にでも崩れるものさ」

シャア：「カミーユ、人の心の中に踏みこむには、それ相応の資格がいる」
カミーユ：「わかってますよそんなこと。大尉には資格があります」
シャア：「そうかな。いくつになってもそういうことに気づかずに人を傷つけるものさ」

カツ：「やめてくれサラ。会いたいんだ。会って話がしたいんだよ」
サラ：「たとえそう思っていても、それを言うのは男じゃないわ。だからあなたのこと、全部好きにはなれないの」

シロッコ：「生の感情丸出しで戦うなど。これでは人に品性を求めるなど絶望的だ」

シロッコ：「生の感情を出すようでは、俗人は動かすことはできても、我々には通じんな」

カミーユ：「なんでそう頭だけで考えて……そんなんじゃ疲れるばかりじゃないかサラ……」

サラ：「カツ、人は正直すぎてはいけないのよ。でもそれが美しいことだって教えてくれたのはあなたよ」

これらノートに書き残した作中の台詞のうち、9割以上劇場版にも出てきた。大人になって感受性が鈍ったのか、他にもたくさんよい作品に触れてきたから感動しな くなったのか、判断つかないけれど、サラやエマさんの存在を忘れていたので、思い出せてよかった……ノートの言葉をつなげてみると、生の感情丸出しを否定 する人が負けて、感情丸出しでぶつかっていく人がニュータイプ的だと評価されている気がする（ネットは、人間の生の感情剥き出し表出を加速しているから、 現代人はどんどんニュータイプ化しているかもしれない）。……エマ中尉やシャアみたいに格好よく生きて行きたいと、改めて思い直した五連休だった。

おまけで他のガンダムシリーズからも名言を。

『逆襲のシャア』より
シャア：「愚民どもにその才能を利用されている男が言うことか」

アムロ：「貴様ほど急ぎすぎもしなければ、人類に絶望してもいない」

アムロ：「馬鹿にして。そうやって貴様は永遠に他人を見下すことしかしないんだ」

『ダブルゼータ』より
プル：「人はね、自分を見るのが不愉快なのよ」

『機動戦士ガンダム　逆襲のシャア』

機動戦士ガンダム 逆襲のシャア [Blu-ray]
バンダイビジュアル 2008-02-22

by G-Tools , 2010/12/05

（2009年9月27日ブログにて発表）

『機動戦士ガンダム逆襲のシャア MOBILE SUIT GUNDAM Char's Counter Attack』は、1988年3月劇場公開されたアニメ映画作品。当時小学3年生だった僕は、地元の映画館に友達と一緒に見に行った。『逆襲のシャア』 は、ガンダムシリーズ中一番の名作と、よくガンダムファンが言う。けれど、僕はそんな名作の印象がなかった。大学生になって、ゼータとダブルゼータを見終 わった後、再び当作品を観てみたが、その時も、ゼータの方が面白いと思った。そして、シード、ディスティニー、ダブルオー、コードギアスなどを経た後の 2009年、生まれて3回目の『逆襲のシャア』視聴にて、当映画作品は、ガンダムというか、日本アニメ史上に残る傑作だと思うに到った。

物語序盤、ブライトとミライの息子ハサウェイとクェスが、ニュータイプの定義について議論する。

ハサウェイ「でもあの人、はじめてモビルスーツに乗った時にちゃんと操縦して、ジオン軍のザクってのを倒したんだぜ」
クェス「本当かな？」
ハサウェイ「コクピットに座っただけで、ガンダムの配線なんか全部わかったって」
クェス「え？（馬鹿にした大笑い）それをニュータイプって言うんだ？」
ハサウェイ「そうだよ」
クェス「インドのクリスティーナが言っていたのと違うな。ニュータイプは、物とか人の存在を正確に理解できる人のことだよ。それもさ、どんなに距離が離れていても、そういうのがわかるようになるの」
ハサウェイ「ああ。人間って地球だけに住んでいた時は、頭の細胞の半分しか使っていなかったんだろ。それが宇宙に出て、残りの頭の部分を使うようになれば、 テレパシーだって予知能力だって高くなるよな。じゃないと、地球とコロニーで暮らしてたら、家族だなんて思えなくなっち

ゃうもの」

クェス「あんたんところの家族はわかりあっているんだ……」
ハサウェイ「オヤジ、いつもうるさいけどな」
クェス「うちなんて、家族で地球にいたんだよ……」

ニュー タイプの発生原因が、遠いところで暮らす家族でも、心が通じ合えるようにするためという仮説は、面白い。富野監督が手がけたガンダムでは、親子が激しく対 立する。息子と娘は父親、母親に反発する。戦場の上司と部下も階級を超えて激しく自分の意見を主張しあう。その葛藤及び、葛藤を解消したいという希求か ら、富野監督独自のドラマが生まれる。

何故小学生や大学生の僕は、『逆襲のシャア』の素晴らしさを理解できず、今になって理解できたのか。要因は2つある。

第1に、社会人となって働いてみて、社会の汚さ、いやらしさを僕自身が知った。不正がいろいろはびこっていても罪に問われない人、組織がたくさんあること を、経験を通して、身に染みて知ったからこそ、地球文明社会の堕落を憂うシャア・アズナブルの言葉の数々が、心に響いてきた。

第2に、悪役が主役の『デスノート』、『コードギアス』を通過したからこそだが、この映画の主役は、ニューガンダムに乗るアムロ・レイでなく、シャア・アズ ナブルなのだと痛感した。今の時代だったら、絶対シャアが主役で映画が作られると思った。『デスノート』の主人公夜神ライトはシャア、敵役のエルはアムロ と重なる。『コードギアス反逆のルルーシュ』（『機動戦士ガンダム逆襲のシャア』とタイトルの語感までそっくりだ）の主人公ルルーシュはシャア、敵役のス ザクはアムロと重なる。1988年当時は、地球に隕石を落として地球を滅ぼそうとする人間がアニメの主役になることなど道義的に許されない時代だったが、今なら、間違いなくシャアが主役の映画になるだろう。『逆襲のシャア』に時代がようやく追いついたのだ。

『機動戦士Ｖガンダム』

機動戦士Vガンダム 01 [DVD]
逢坂浩司
バンダイビジュアル 2004-01-23

by G-Tools , 2010/12/05

（2009年9月22日ブログにて発表）
1993年テレビ放送。放送当時は、絵のレベルがＺやダブルゼータの頃より落ちた印象があったので（進化洗練された絵柄をわざとナチュラルに戻したのかも）、あまり見なかった。けれどガンダム30周年だし、ガンダムシリーズで一番良いと言う人もいるし、ＤＶＤレンタル料金はデフレで百円だし、見てみた。

1993年当時、富野監督は精神を病んでいたようで、作品もなんだかゼータよりもおそろしい予測不能の阿鼻叫喚、神話的物語展開になっている。Ｖガンダムで何より恐ろしいのは、当初主人公のウッソ少年が憧れるお嬢様役だったカテジナさんが、最後の敵になることだ。少年のウッソが戦場に借り出される現状を見て、平和主義者のお嬢様カテジナさんは、子どもを戦場に出す大人の事情をさんざん批判している。このどう見てもヒロインキャラが、まさか最後の敵になるとは、一体誰が予測できようか。

「ベスパだろうが、リガ・ミリティアだろうが、あたしの腕の中の男たちの邪魔はさせないんだよ！！　はあぁっ！！」
「戦え・・・ウッソ、クロノクル。勝った方をあたしが全身全霊をかけて愛してあげるよ！？うはっ、あはは、あーはははは――！」

自分を恋する男2人が戦う様子を見て、邪悪な顔つきで叫ぶ最終回近辺のカテジナさんの様子は、アニメ史上に残るトラウマ的映像である。

Ｖガンダムで他に特筆すべき点としては、ガンダム史上はじめて宗教問題が前面に出ているところだろう。敵のザンスカール帝 国は、オウム事件勃興前の放送当時の時代状況を反映してか、マリア主義という絶対平和の母性宗教を掲げている。主人公ウッソのまわりにも、女性のキャラが次々現れては、死んで行く（登場人物死亡数はガンダムシリーズ最多と言えるほど多い。新しく誰か出てきても、どうせ今回か次の回で死ぬんでしょと視聴者側 もニヒルになってくる）。

過度の女性キャラ出現（及び女性キャラが戦死する瞬間全裸になる現象）は、当初、視聴率アップのためだろうかと 思った。出資企業やプロデューサーにはそうした下品な思惑があるだろうが、富野監督は商業的成功を動機に持つだろう下品な欲望にも哲学をこめる。マリア主 義は、男性中心の社会体制への改革であると言われる し、女性が人を殺す兵士として戦いに出ねばならない戦争の現実も克明に描写される。主人公ウッソの母親も、戦場に出るし、兵士として戦死する。女性登場人 物の顔はみな、最近流行りの記号化された萌え系美少女ではなく、人間味のある顔である。ウッソたちは、戦争、兵器マニアではなく、外で遊ぶのが好きな普通の少年だと、作品中何度も言及されてもいる。

アニメの美少女キャラや、ガンダムに萌えるオタク的状況を、富野監督自身は嫌悪していた。そのような状況に対峙するため生まれた極限の悲劇が、Ｖガンダムの物語だろう（最近は情報技術の発達によって、1億総オタク化したが故に、映像作家がファンのオタク的欲望を批判する意味は、失効したように思えるが）。

（2009年9月22日ブログにて発表）
今日は『機動戦士Ｖガンダム』中、名作と思う第40話と第44話について、書き留めておく。

＜第40話＞
ウッソは敵の工場で、自分が殺した兵士の家族に会う。何故家族の顔がわかったかといえば、兵士がコクピットに家族写真をおいていたからだらだ。

ウッソは「お父さんを殺したのは、僕です」と、母と幼い娘たちに告白し、謝罪する。母親は、娘たちと年齢の代わらない子どもが戦場に出ていたのかと驚く。

ウッソは、戦場に即席で作った父親の墓に、母娘を連れて行く。「やっぱりあいつが殺したんだ！」と父の墓を前にして娘が言う。ウッソはうつむいたまま非難の声を受け止める。

「パパを殺した人がパパのお墓を教えてくれるわけがないでしょう。そういうふうに簡単に人を悪者みたいに言うことはなりません」と気丈な声で母が娘を諭す。

母も、愛する夫の命を奪ったウッソに憎しみの心を持っているだろうが、子を持つ大人として、怒りの気持ちを抑えているのだろうと思える名シーンだった。

＜第44話＞
中学生の頃、テレビで見た時すごいと思った回だったが、今回もギリシア悲劇的ドラマ展開の見事さに唸った。

ザンスカール帝国の親衛隊、キスハールとカリンガは、戦争の合間に結婚を誓い合う。

キスハールはウッソたちに捕まって捕虜になったが、脱出する。

カリンガは、ゲリラ組織の捕虜になったのだから、キスハールはもう死んでいると思いこんでいる。宇宙空間の戦場で、キスハールの乗っていたモビルスーツを見つけたカリンガは、逆上する。

死んだキスハールのモビルスーツに乗って、のこのこ戦場に出てくるなんて、どこまで下劣な奴らなんだとカリンガが猛攻撃する。キスハールは、「俺だ、気づけカリンガ」と叫ぶが、2人は戦場で同士討ちしてしまう。

瀕死の重傷を負った二人は、モビルスーツから脱出し、宇宙空間で抱きしめ合う。死を間近にしながら、結婚後の夢を語り合う二人。光り輝く宇宙ステーションを 見つめながら、あれが二人のウェディングケーキだねと言って、微笑んだ恋人たちは、爆発に巻きこまれて、ともに戦死する。

バックを流れる千住明の悲壮な音楽とともに、ガンダムシリーズ上、強く印象に残る悲劇の一つだった。

『新機動世紀ガンダムW』

新機動戦記ガンダムW メモリアルボックス版 Part.I (初回限定版) [DVD]
村瀬修功
バンダイビジュアル 2007-08-24

by G-Tools , 2010/12/05

（2009年10月3日ブログにて発表）

『新機動戦記ガンダムW（ウィング）』は、1995年4月から1996年3月まで放送のサンライズ制作テレビアニメ作品。エヴァンゲリオンのテレビ放送とかぶっている。現代では、エヴァの方が圧倒的に評価が高い。僕自身『ガンダムW』は黙殺していたが、視聴後は、エヴァより内容的にすごいのではないかと思えてきた。『ガンダムW』は、ガンダムシリーズで初めてアメリカ合衆国で放送された作品だが、完全平和主義を唱えるヒロインが出てくるガンダムが、アメリカで放送されたというのは、とても意義あることだと思えた。

劇中対立するのは、宇宙コロニーと地球圏統一連合。ガンダムを操る少年5人は、宇宙コロニーの側に立つ。地球圏統一連合は武力を行使して、コロニーを制圧 する＜帝国＞として描かれている。まあこれは一番単純な要約で、『ガンダムW』は、ＳＦロボット戦争アニメというより、ＳＦロボット政治アニメ。作品内の 政治組織の対立構造は、現実の国際政治のごとく複雑に入り組んでいる。地球圏統一連合内の軍部急進派ＯＺ（オズ）が、軍事クーデターを行い、地球圏統一連合のトップに立つ。ＯＺは、軍部の平和主義者を自分たちで殺さず、ガンダムに襲撃させて、殺させた。地球に暮らす人々は、宇宙コロニーとガンダムに対する憎悪を募らせる。ガンダムは、はめられたのだ。ＯＺはガンダムを倒すため、クーデターの正当性を地球の人たちに納得させる。

地球内でのガンダムによるテロ活動に、宇宙コロニーの人たちも嫌悪感を募らせていく。地球と宇宙コロニーの関係悪化を懸念 した主人公の少年5人は、ＯＺに降伏して、ガンダムを手放す。ガンダムを操縦する主人公たちが、シリーズ中盤で敵軍に完全敗北したというのが、『ガンダムW』の長所である。しかも戦って負けたのではない。ガンダムは十分強いけど、このまま連合軍とコロニーの反乱軍が戦闘を続けていると、政治関係がまずくな るから、戦闘をやめざるを得ないという、何とも現代史的な物語展開である。ガンダムは自爆したり、ＯＺに回収されたり、一度完全に敗北するのだが、主人公 の少年たちは、地球連合への抵抗を諦めていなかっ た。不屈の精神で活動する少年たちの姿が、格好良かった。

さらに、『ガンダムW』最大の注目点は、ヒロインのリリーナ・ドーリアン である。登場時のリリーナは、単なる世間知らずのツンデレお嬢様だった。ツンデレという言葉もなかった時代に完璧なツンデレの美学を体現していた初期リ リーナも魅力的だが、作品途中、リリーナは完全平和主義を主張したため、地球連合軍に武力制圧されたサンクキングダムの王族、ピースクラフト家の生き残り だったということが判明する。リリーナ・ピースクラフトと名乗り始めた以後のリリーナは、父が果たせなかった完全平和主義実現のため、まるで別人になった かのように、高潔な人格に生まれ変わる。「戦争するのは、愚かなことです」と語る完全平和主義者リリーナ・ピースクラフトの姿を見ていると、テレビアニメ の中で、ガンジーの平和主義を見るかのような錯覚を覚えた。

『ガンダムW』テレビシリーズ後半は、より政治関係が複雑になる。軍事クーデターを成功させたＯＺは、地球だけでなく、宇宙コロニーも支配しようとする。武 力と支配の意図は隠しつつ、平和的友好を持ち出して、コロニーの政治関係者を魅惑していくＯＺ。しかし、ＯＺの首領トレースは、地球連合内で失脚、地球連合は、ロームフェラー財団に実質的権力を奪取される。

ここまでも相当二転三転しておりややこしいが、さらにロームフェラー財団は、自分たちの野心を隠すため、完全平和主義者のリリーナ・ピースクラフトを地球圏連合の女王として前面に立てる。リリーナも傀儡政権にされているとわかりつつも、完全平和主義を実 現するためならと、渋々女王の座に立って、初回演説の際、テレビを見ている宇宙市民に向けて、完全平和の実現を呼びかける。夕方放送の子ども向けテレビアニメなのに何かすごいことになっていると思いつつ見ていると、失脚していたＯＺの首領トレースが政治の場に復活、リリーナは女王の座を追われる。

宇宙の中には、コロニー支配を企む地球圏連合、何もしない宇宙コロニーの人々、宇宙コロニー内の急進派、いずれの組織にも属さず独立してテロ活動を続けるガ ンダムたちという勢力図が生まれる。一体この後どうなるんだと思っていたら、物語終盤ではリリーナの兄、ゼクスが宇宙コロニー内の急進派リーダーとなり、 地球に総攻撃を仕掛けようとする。ゼクスを迎え撃つトレースの軍隊、ゼクスとトレース両方の武力を破壊しようとするガンダム、無意味な戦争をとめようとするリリーナ。

最終回で、ゼクスもトレースも、戦争が無意味だと言うことを人類に理解してもらうために、進んで悪役を引き受けていたということが判明する。 平和の尊さを理解してもらうために、進んで自ら悪役を演じてみせる、『ガンダムW』の展開は、『コードギアス反逆のルルーシュ』の先取りだと思えたし、ガンダムをはじめとした日本のＳＦロボットアニメが伝えてきたことだと思えた。何せ外国のアクション戦闘アニメやゲームは、過激な暴力描写を流すだけだったり、正義と悪がわかりやすく色づけされていたりするだけで、戦争の哀しみを伝えるものは少ないから。

『ガンダムW』の中には、ディスティニー、ダブルオー、コードギアスといった2000年以降のサンライズ作品の要素が、全て萌芽してたいように思える。また、リリーナ・ピースクラフトは、その行動と性格からして、ガンダムシリーズ最高のヒロインだと思う。戦争と欲望渦巻く世界の中で、完全平和主義の理想を唱えるヒロインなんて、ガンダムとい う作品でしか成り立ち得ないヒロイン像だし。

（2009年10月9日ブログにて発表。ガンダムWの政治演説について）

夜、テレビをつけていたら、偶然『新機動世紀ガンダムW』の再放送が流れていた。そこで主人公の少年が、延々と自分が書いた論文を読みあげ始めた。夕方放送されていた少年向けアニメにしては、深刻で、難しい内容だ。以下、主人公のヒイロ・ユイが学校の授業中、教壇で読み始めて、明るく楽しそうな顔を していた生徒全員がドン引きした論文の全文を、少々長くなるが引用する。

ヒイロ・ユイ「太陽系に生物が生息することを奇跡的に可能にした惑星、それが地球 である。アフターコロニー195年、コロニー開発において、人間は豊富な資源と、培われた技術力で新たな大地を所有することになる。しかし、それはあくま でも母なる大地、地球の疑似空間に過ぎないのだ。

　コロニーの作られた意味はなんだったのであろうか？　地球での人類の生活を豊かにするための技 術開発が、その主な目的と聞く。人類は、この疑似空間に、無理な要望を持ったのではないのか？　自らの生命維持は、自然の脅威もなく、地球以上に安定性を持つ。留まることを知らない発展は、人類に永久的な生存を約束したかのように見える。宇宙にはゼロからのスタートを許されたと浮かれた時代もあったのだろう。しかしコロニーが、いや、人類が地球を忘れることができるとは信じがたい。

　コロニーの開発技術は地球に何をもたらしたのか。地球が最も欲す る技術、それは軍事力なのだ。破壊は人類の捨てることのできない精神なのだ。今、コロニーは軍事的な気質を持ちつつある。地球が忘れられないのだ。地球の 美しさは偉大だ。人類という大きな力を持つことになった動物は、一つの惑星の管理まで考えだす。惑星規模では、生物生存など、刹那的時間なのだ。事故のことなのだ。所詮、人間が考えられるのは、何も変わらないのだ。人間が宇宙に出た年月は、無駄であったのだ。現実の前に理想は夢でしかない。偽りの生活空 間……偽りの平和主義……。宇宙は、より多くの戦いを生む温床にしか過ぎない。

　戦争は多くの命を奪う。そのことの哀しみを人間は忘れたことはな いのだが、決して戦うことをやめようとはしない。流された血や涙は、儀式の飾りに過ぎない。時代の節目は、戦争でしか語られない歴史がある。平和のために戦うなどと色あせたきれいごとは、過去、何度となえられた名台詞だろう。

　コロニーは平和のために軍備を持つという。地球と何も変わりはない。仲 間入りができたつもりなのだ。多くの血を流すことで、意気揚がるというのだろう。では、人間は何故戦うのだろう。戦うことに存在意味があるのかもしれな い。戦っている人間には充実感がある。そして、戦っている人間が、汚れて見えないのも事実だ」（第18話「トールギス破壊」より）

この演説を偶然聞いて驚いたからこそ、『ガンダムW』を全部見てみようと思ったのだった。小説、学術論文、ヨーロッパのインテリ向けの映画などでは、こうした難 しい表現を当たり前に見ることができる。しかし、アニメでこうしたことをやるのは、日本だけである。それも、ある程度年齢の行った、教養ある若者向けに作られた前衛芸術アニメ映画作品などではない、夕方テ

レビで放送する、子ども向けのアニメ番組でやってしまうのだから、日本のアニメの包容力、可能性はおそるべきものである。

（2009年10月17日ブログにて発表）
本日は、ポスト・スペースコロニアル文学とも言うべきSF政治アニメ作品『新機動戦記ガンダムW（ウィング）』より、リリーナ・ピースクラフト様が残した平和に関する名言集をお届けします。

第30話より
リリーナ「この世界から少しでも早く戦争がなくなる方法を、一緒に考えてまいりましょう」
ドロシー「お利口さん…」
「ドロシー、なにか？」
「とても素晴らしいと思います。この世界がみんなリリーナ様だったら、すぐにでも戦いを愚かなことと考え、この世界から戦争はなくなりますわ。でも、みんながリリーナ様だったら、リリーナ様の素晴らしさは目立ちませんわね」.
「ドロシー、私も自分の言っていることが少し綺麗事のように思えます。でも愚かな行為と皆承知している戦いを何故してしまうのか？答えはすぐ出そうな気がしていますわ」
「リリーナ様、私はなぜ戦いがなくならないか、理解しているつもりよ」
「人は戦うことが好きなの。そして戦うことで本能を満たすのよ」
「結果的に多くの命を失うわ」
「リ リーナ様、私は結果に興味がないの。結果なんて放っておいても出るものでしょう？　行動することが素晴らしいの。戦うという行動が人の持つ最高の魅力なん だわ。人間は歴史の中で、何度も何度も戦い続けている。戦うことが人間の生きていく目的のように。だから、私はこう考えたの。戦ってはいけないんじゃなく て、戦わなくてはいけない！　それが人間なんだって」
「私は別の考えを持っています。私達は過去の歴史の悲劇を未来に繰り返さないことができるはずです」
「その聡明な考えも戦争には必要なの。歴史はそういう人物が命を狙われることで大きく動くもの。リリーナ様、やっぱりサンクキングダムはこの時代のメインステージになると思うわ」
「ドロシー、見ていて。私、命のある限り、完全平和主義を通してみせます。たとえ私が殺されても、この主義は、いつか実を結ぶでしょう」
「そうですわリリーナ様。死なんか恐れないで。死は生まれた時に既に与えられている結果なんですもの」

・・・ 完全平和主義者のヒロインリリーナ様とお話されているドロシー嬢は、リリーナ様と正反対に、戦争大好きの女の子です。性格のきついドロシーの数々の反論、 誘惑に対して、リリーナ様の理想と平和への意志は揺らぐことがありません。ドロシーとの対話を通して、リリーナ様の姿を浮かび上がらせる。リリーナ様の姿 は、サタンの誘惑に屈しないキリストのようでもあります。『ファウスト』的な、悪魔と人間の対立のドラマ作りです。引き続き、リリーナ様とドロシー嬢の対話を読んでみましょう。

第36話より
ドロシー「完全平和主義のサンクキングダムも、遂に戦争の嵐に巻き込まれてしまいましたわね」
リリーナ「ドロシー、ファーガンの指示に従わなかったの？　早くお逃げなさい」
「まさか！！　この事態の成りゆきを見届けなくては、サンクキングダムに来た意味がないもの。どうなされるんですか、リリーナ様？　徹底抗戦ですか？友好国に軍事援助を求めますか？」
「サンクキングダムにそのような手段はありえません」
「では、ほかにどんな手段がありますの？　このままサンクキングダムが滅んでしまったら、完全平和主義は夢と消えてしまいますわね」
「そんなことはありません。人の願いは、真の平和なのです」
「その平和を守る為に、みんな美しく戦っていますわ。なんて素敵なんでしょう！」

リリーナ「戦争好きのあなたの趣味に付き合っている暇はないわ」
ドロシー「リリーナ様はずるいわー」
「ずるい？」
「平和なんていう甘い言葉でみんなを集めておいて、いざとなったら自分では何もしないんですもの」
「しないのではないわ」
「ええ、できないだけよね。そもそも完全な平和なんて、実現不可能なんだから」
「何を言うの！」
「私の先生は仰っていたわ。人は戦う動物であるって。そして戦い続けて勝ったものが支配すればいいと。それでこそ秩序は完成するのではなくて？」
「その考えでは、秩序は平和を生み出すものではない。単なる支配だわ」
「この考えなら、秩序の実現に向けて行動を起こせるわ。現に戦いのあるこの世界で戦えない完全平和主義に何が出来るの？それこそ単なる絵空事よ」

ドロシー「何もできない完全平和主義なんて今は駄目。戦う動物達の餌食にしかならないわ。今は戦うべきよ、リリーナ様」
リリーナ「人は戦う動物だからといって、このままで良いとは思えません。戦わずに平和を実現する道を人間は選べると、私は信じています」
「理想を掲げるリリーナ様って、やっぱり素敵ー！　そんなリリーナ様が一声かければ、トレーズ派やオズに不満を持つ兵士達が、すぐにでも駆けつけてくるでしょう」
「サンクキングダムとこの私の存在が戦火を巻き起こすと言うのなら…　できることから始めます。完全平和に向けての新しい一歩を」.
「そう。まずは行動ですわ、リリーナ様」

・・・ああ、リリーナ様。すばらしいですわ。あら、私としたことが、ドロシー嬢のしゃべり方がうつってしまったようですわ。最後に、リリーナ様以外の方々の言葉も含めた、ガンダムWの名言集を記して、この章を終わりにします。

第46話より
リリーナ「ヒイロ…　やっぱりあなたって、不思議な人ね」
ヒイロ「お前ほどじゃない」
リリーナ「いいえ、あなたはわたくしに生きる力や希望を与えてくれる。きっと他の人にもそうなんでしょ」
ヒイロ「何度も言わせるな。お前ほどじゃない」

リリーナ「間違っています。平和は、戦争から生み出されるものではありません！」

ドロシー「ミリアルド様を止めるにはこれしかないわね（ドロシー、リリーナの前で拳銃をちらつかせる）」
リリーナ「それはできません」
ドロシー「実の兄を撃てないから？」
リリーナ「いいえ、暗殺で得られるものが、本当の平和とは思いません」

第49話より
ゼクス「完全平和を作るためには条件がある。一つは全ての兵器を排除すること、もう一つは人々から…　戦う意志を取り除くことだ。リーブラを落とす、この行動しか、完全平和への道はない」
ヒイロ「地球を失った人々はお前を憎み、コロニーはお前に頼る。お前がいる限り、同じ過ちが何度もくりかえされる」

ゼクス「何故……殺さない？」
ヒイロ「リリーナが悲しむ」
ゼクス「フ……完全平和主義に必要なものがもう一つあった。人を思いやり、理解してやる強い心だ。お前のような……」

ゼクス「噂は好きではないな。敵からは標的にされ、味方からは実力以上の成果を期待される」

ゼクス「地球が美しいのは、こうして宇宙から見ることができるからだ。地上にいる者には、真の美しさは理解できない」

『劇場版ラーゼフォン　多元変奏曲』

ラーゼフォン 多元変奏曲 初回限定版 [DVD]
出渕裕
メディアファクトリー 2003-09-25

by G-Tools , 2010/12/05

（2009年10月18日ブログにて発表）

『ラーゼフォン』は、『鋼の錬金術師』、『交響詩篇エウレカセブン』などで知られるアニメ制作会社BONES（ボンズ）の制作。テレビ放送シリーズを劇場公開用にまとめたもの。よく言われるように、エヴァンゲリオンに設定が類似してるが、この作品独自の面白さは当然ある。

地球の他の地域から膜で隔離されてしまった東京。東京と他の地域は、時間の進み方が変わってしまう。東京に残った主人公の少年は、高校生のままだが、東京を離れた恋人の彼女は、大人になった。久々に再開した二人が、異星人というかよくわからない謎の存在と戦う物語。

大人になった彼女は、そんなに歳とってないだろうに、結構な大人の女性として描かれている。現代作られるアニメなら、男女の設定が逆転していただろうと思え る。男の主人公だけが歳とって、高校生時代の彼女と再会する。彼女は昔と変わらないまま、行方不明になった自分をまだ愛してくれている・・・

これは何だか萌える展開だが、ただ単に男性視聴者の性的欲求を萌え上がらせるだけで、オタクに受けてもドラマにならないだろう。女性の側が歳をとってしま い、かつての恋人だと打ち明けられないままに、高校生のままの彼氏と再会する。これでドラマが成立する。最近の深夜アニメは視聴者の性的欲望に奉仕するサービスシーンが多すぎる。ドラマ作りが二の次になっていないかと心配だ。

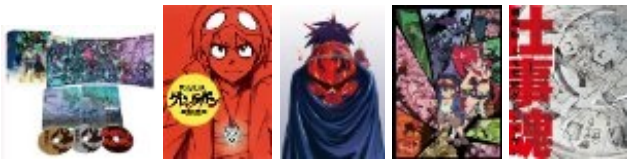
最後に、劇場版ラストシーンの名言を。

「ねぇ、おばあちゃん。結局アリアスは、本当に現実の世界へ戻ったのかな？」
「どうして？」
「だって、人の世は夢ではないのか？って、言ってるんでしょ」
「そうね。だけどアリスは本当に夢の世界に行ったのかしら」
「え？」
「結 果的にアリスは現実の世界に戻ってきたけど、本当はそれってどうでもいいことなのよ。どっちの世界が現実なのかなんて関係ないわ。だって、彼女には記憶が 残っているんだから……鏡の国で経験した素敵な記憶が。少なくともそれは彼女にとっては現実じゃないかしら。それでいいんじゃない。おじいちゃんはそう 言ってたわ」
「おばあちゃんて、本当におじいちゃんのこと好きだったんだね」
「え？　どうして？」
「だって、おばあちゃん二言目にすぐ、おじいちゃん、おじいちゃんって言うんだもん」
「あら、そぉ」
「でもそっか、おじちゃんってホント愛されてたんだね。おじいちゃんも、おばあちゃんのことちゃんと愛してくれてた？」
「大人をからかわないの」

現実で体験したことの記憶と、ファンタジーで経験したことの記憶に違いはないという素敵な理論。ある意味、オタク的な願望だけれど、記憶は人生にとっても、文学にとっても大切なものだ。

『劇場版　天元突破グレンラガン紅蓮篇／螺巌篇』

劇場版グレンラガン 紅蓮篇 【完全生産限定版】 [DVD]
アニプレックス 2009-04-22



by G-Tools , 2010/12/05

（2010年9月25日ブログにて発表）

『劇場版 天元突破グレンラガン 紅蓮篇』は、ガイナックス製作テレビアニメ『天元突破グレンラガン』の劇場版。エヴァンゲリオンのような社会現象にならなかったし、個人的に絵が好みではなかったので、BSアニメ夜話で取り上げられていたのを見た後も、スルーしていた。いざ見てみたら、作画のすばらしさに驚愕。見ている最中ずっと、連続して繰り出されるすばらしいカメラ割り、アクション演出を堪能した。

ピクサーのフル3Dアニメを見 て、日本の2Dアニメ文化は、アメリカに完全に負けていると思ったけれど、グレンラガンを見て反省。執念が入りまくった手描き。派手で躍動感に溢れた動き の連続。『カールじいさんの空飛ぶ家』よりも、すさまじいアニメーションが展開されていると思う。

ウィキペディアによると、監督の今石洋之は、アニメーター金田伊功の影響を受ける「金田フォロワー」の1人とのこと。2009年に亡くなった金田氏は、日本アニメの少ない予算、時間、 セル枚数で、いかに格好すばらしい表現を作り出すかに腐心した日本アニメの革新者であるという。金田フォロワーは、ポージングやアクション演出がすばらし いけれど、キャラクターの顔が現代流行の顔と違う場合が多い。グレンラガンのキャラ絵に魅力を感じない人も、ぜひ動画を見て欲しい。人物の立ち方、動き、 爆発が、想像の範囲を超える規模で展開する。

ディズニー、ピクサーとは別方向に進化している。2Dの少ないセル枚数の作画で、ここまで劇的に表現できる。もちろんストーリーも熱い。

ロボットアニメが、カンヌやベルリンやアカデミー賞で評価される日は遠いだろうけれど、見たら確実に「表現の熱」をもらえる創作物だ。

（2010年9月25日ブログにて発表）
『劇場版 天元突破グレンラガン』紅蓮篇と螺巌篇より、名言を引用します。

カミナ「お前を信じろ。俺が信じるお前を信じろ」

……「お前を信じろ」は、グレンラガンという作品を貫くテーマとして、作品中何回も変奏されます。

カミナ「目覚めたか？　お前が迷ったら、俺が必ず殴りに来る。だから安心しろ。お前のそばには俺がいる。お前を信じろ。俺が信じるお前を信じろ」

カミナ「いいかシモン、忘れるな。お前を信じろ。俺が信じるお前でもない。お前が信じる俺でもない。お前が信じる、お前を信じろ」

……カミナは「お前を信じろ」という言葉を残して、亡くなります。偉大なるリーダー、カミナが不在になった後、残された少年シモンの成長物語が語られます。

シモン「舐めんじゃねえ。時間だろうが空間だろうが多元宇宙だろうが、そんなこと知ったことじゃねえ。てめえの決めた道を、てめえのやり方で貫き通す。それが俺達、大グレン団だ」

シモン「俺達は一分前の俺達よりも進化する。一回転すれば、ほんの少しだけ前に進む。それがドリルなんだよ！」
アンチ＝スパイラル「それこそが、滅びへの道。螺旋族の限界に何故気づかん？」
シモン「それは貴様の限界だ。この閉ざされた宇宙で、王様気分で他の生命を封じ込めた、貴様自身の限界に過ぎない！」
ニア「そう、人間にだってもっと大きなやつがいたわ。その人たちのためにも、私たちは前に進む。人の心は無限、その大きさに私も賭けた！」

シモン「覚えておけ、このドリルは宇宙に風穴をあける。その穴は後から続く者の道となる。倒れていった者の願いと、後から続く者の希望、二つの想いを二重螺旋に織り込んで、明日へと続く道を掘る。それが天元突破、それがグレンラガン。俺のドリルは、天を貫くドリルだ！」

シモン「それでも俺は、俺を信じる。俺が信じる俺達を、人間を、未来を。俺は信じる、ドリルは俺の魂だ！」

カミナ「無理を通して、道理を蹴っ飛ばすんだよ」

カミナ「『もし』とか『たら』とか『れば』とか、そんな想いに惑わされんな。自分が選んだ一つのことが、お前の宇宙の真実だ」

カミナ「俺の宇宙は、お前のここにある宇宙だ」

…… 知的生命体の可能性は無限にあるけれど、選択肢の多さに迷っていたら、がんじがらめで進めなくなる。自分が選択可能性の中から、一つを選び取って決定する ことで、自分の宇宙が確定する。多次元宇宙が、解釈によって１つの宇宙に収束する。（ここらへんの平行宇宙解釈は東浩紀『クオンタム・ファミリーズ』と類 似）

グレンラガンでは、歌舞伎みたいなリズムにのった、決め台詞が次々繰り出されます。ドリルにも絵柄にも全く興味なかったけれど、見終 わると、もうドリルしかないと思えるすばらしさ。ドリルの螺旋は、DNAの二重螺旋、生命力の象徴。文明が発展したら、宇宙が廃棄物で汚されるけれど、そ こで人間投げ出しちゃいけない。人間は宇宙に比べたらちっぽけで、葦みたくか弱い存在だけれど、人の心は無限大。生命という二重螺旋のドリルを回して、明日へと続く道を掘る。とにかく熱い作品でした。作画も台詞も熱すぎる、クールとは無縁のドリル魂。

この電子書籍は、私春昼がブログで発表したアニメ批評の自作選です。日本伝統のロボットＳＦものアニメの批評を集めています。マクロス、攻殻機動隊、ファースト以外のガンダム多数の批評を収録しています（個人的にファーストガンダムはあまり好きでなく、ゼータ、ウィング、00のセカンドシーズン推しです）。エヴァはいずれ取り上げます。

ブログでは、今も時々アニメ批評を書いています。電子書籍に批評を追加した時には、トップページに更新履歴を書いていきます。
ブログ「7代後の孫への話」のリンクはこちらです。

表紙画像は、マルク・フランツ（1880-1916）「Fighting Forms」（1914）です。なんかガンダムとかマクロスの精神と精神が戦いあうみたいなイメージですね。エロスとタナトスが同居してぐろぐろになるけど、最後は愛で救済される感じ（笑）。ガンダムは悲劇というか破滅というか軽い絶望で終わって、マクロスはラブコメ的に救済されますが（笑）。

＜最近の更新履歴＞
2010 年12月5日：文字ばかりで寂しかったので、批評対象アニメの画像を追加しました。画像は、アマゾンの商品リンクを利用しています。